

2. 一橋大学運動部活動と日本のスポーツ展望

スポーツ評論家 川 本 信 正

唐木：今日は、かつての大学の運動部の状況、日本のスポーツ界の問題点などについて、先生のお話を聞かせていただきたいと思います。

「しごく」という言葉もなかった

川本：私が商大に入ったのは1925年です。関東大震災の2年後です。卒業は1931年。ロサンゼルスオリンピックの前の年です。

その当時の商大は、予科3年、本科3年、その他に専門部があった。そういう中でスポーツ活動などをしていたわけです。

唐木：それは国立ですか。

川本：卒業する年に国立で講義が始まったので、試験だけ受けに行きました。もっともその前に、国立に行って、食堂や喫茶店に朝から行って、ねばってました。

高津：先生は『スポーツの現代史』という本を書かれましたが、そこに東京商科大学（現一橋大）の籠城事件（1931年10月、予科と専門部を廃止しようとする政府の方針に全学生が反対し、神田一橋の旧校舎に立て籠ってそれを撤回させた事件）のことが書かれています。当時運動部の事件にたいする対応はどうでしたか。

川本：これはどこの大学でも同じだったんですが、戦後の体育会運動部の在り方とはまったくちがって、非常に自由な雰囲気だったですよ。「しごく」なんていう言葉もなかった、われわれ運動スポーツ関係のあいだも、横の友好関係も非常に良かった。商大の運動部はみんなそうでした。

戦後は、まるで体育会と学生自治会が対立したような環境になっちゃったでしょう。学園紛争のさなか、運動部の連中は大学の用心棒みたいになってバリケード作っちゃって、共闘派の連中が入ってくると上から砲丸をぶつけたり、槍をぶつけ

たり、長椅子を投げたりして妨害してた。大学の改革に対して実に保守的、盲従的でしたね。

高津：籠城事件のことなんですけれど、この時は運動部はどういう役割を果たしたのですか。

川本：役割は別にしていらないと思う。すべて運動部活動をやめちゃって、それに合流した。いわゆるストライキをやった。みんな一橋の校舎にたてこもったんです。

高津：すべての運動部がですか。

川本：すべての運動部が活動停止した。われわれの時代は、大学の予科の校舎が石神井にあったんです。校舎っていってもバラック建ての校舎で、専門部を含めた部室があったんです。陸上競技の部室、ホッケーの部室ということで。そのなかに社会科学の部室もあって、私の属していた陸上競技のとなりがSPSという社会科学研究会。週に2回くらい読書会があるんです。そのときは「となりは読書会だから静かにしろ」って言って。対校競技があるでしょう、そうするとそのSPSの連中がみんな応援に来てくれるんです。非常に仲がよかったですね。後から分かったんですが、そこに村瀬という共産党のオルグがいたんですよ。これが必ず来てくれる。私たちの応援に。そしてある時、目白の学習院で学習院との対校競技がありまして、その帰りにみんな散らばって、私と村瀬くんとが二人で歩いて目白の駅の方へ行った。そうしたら向こうから二人連れがだんだん来まして、いきなり村瀬をつかまえた。それは特高だったのね。それで村瀬くんが捕まって私は何のことだかわからない。あぶないなと思ったんですけど私はつかまらなかった。目白の警察まで行きましたよ一緒に。「どういうことですか」といったら、「そういうことはいえない、帰れ」といわれ、全然受け付けてくれなかったですね。そんなふうで運動部の連中と社会科学の連中などは非常に仲

良かった。

高津：当時、東大では校友会改革運動をおこしましたが、運動部が右翼系の団体と結びついてそれをつぶすという動きがありました。東大や一高では運動部対左翼系という対立があったのですが。

川本：新人会の対立ね。それはあったでしょうね。ところが新人会にもスポーツやったのがいるんですよ。ラグビーをやっていて、のちに体協の理事長になった、清瀬三郎という人がいます。赤門運動会というのは明治時代に陸上運動会の始まった頃からできていて、その系統はずっといまだに多少尾をひいとるかもしれませんね。系列があったんです。それに対して新人会は後からできて、赤門運動会との対立ははっきり知りませんがもあったかもしれない。新人会は有名な大宅壮一なんかが闘士だったから。

高津：早稲田でも校友会改革運動があって、運動選手が学校のマネキンになっているという……。

川本：それ戦後の話じゃない。

高津：いや戦前です。1930年代の半ば頃です。思想善導というのを文部省がやりますね。各大学に学生課を設けるという動きがあり、そういうなかで運動部が……。

川本：つまりね、あの当時は松田っていうのが文部大臣をやっていて、それが思想善導のためにスポーツを奨励せよといったんです。それで各学校がスポーツ奨励をしたことははっきりしていますね。

高津：そういう意味で、東京商大でも文化系が運動部は予算を取りすぎるといって抗議するような動きがあったのではないですか。

川本：それはあったかもしれません。

高津：それでも自由な雰囲気であったのですね。

川本：そうです。第一、私などは陸上をしていて、本科の2年でキャプテンにされた。その当時、マネージャーでもキャプテンでも部員の選挙ですから。だから3年の先輩なんて私の指揮下に入っちゃった。お互いにあだ名で呼び合うしね。先輩が威張りちらすなんてことは絶対なかった。

高津：運動部ごとにOB会ができて、後援するよ

うになったのはいつごろからですか。

川本：すでに私のときにはありました。陸上部はみんな親切な人で、先輩が恐いなんて思った記憶なんて全然ないですよ。

高津：城丸章夫という教育学者が、運動部が軍隊式になっていったのは1930年代後半からといっています。軍隊式の内務班型の人間関係を模倣したという見解を述べておられるんですが、東京商大ではどうでしたか。

川本：商大ではなかったですね。戦後と戦前とを混同した考え方ですね。1930年代後半からそういうことがあったろうということじゃないんですか。だけど1930年から40年にかけて大学がだんだん軍国体制に組み込まれていくことは事実ですからね。

学生だけの独立自治団体

高津：13校問題、体協改造問題ですけども。川本さんは学生の運動をブルジョア革命といういい方で高く評価されておられます。そのあと昭和3年に日本学生競技連合が北沢清さんなんかの力でできるのですけれども、このような独自の学生組織が誕生する理由をご存じですか。

川本：私はそれに関係してました。みんなの声で学生連盟を作ろうじゃないか、陸連は頼むに足りないということですよ。京大の高柳健三君がその前文を作ってくれたんですけど、日本学生陸上競技連合の規約には「本連合は学生だけの独立自治団体であり、本連合の規約以外いかなる支配も受けない」とあります。そのころ学生の団体でも先輩が組織を作ってそれに学生が従っていたのですが、日本学生陸上競技連合はそれを排し自分たちだけで自治団体としてやっていくことにしました。したがって顧問とかそういうものには先輩を入れなかった。ただ大事なことは会計だということで、会計監査だけは学生がやらないで先輩に頼もうというので二人の監事を頼んだわけです。

この学生陸連を見て非常に感動してボクシングでも学生ボクシング連盟を作った。剣道も日本学

生剣道連盟を作った。これらも同じように学生独立自治団体とうたっています。

高津：そうしますと、13校問題がきっかけになって種目別競技連盟が成立してくるということになる。しかし、限界があった。

川本：そうですね。できたけれども、陸連は明治以来東大系の人勢力が占めていて、学生の主張なんか入れてくれない。これに対する不満があり、陸連と一時けんかになったことがあります。

そしておもしろいですね、当時高等師範に宇野勝久という走り幅跳びの選手がいたんです。学連の役員をやっている、陸連に何回か交渉に行ったんです。そうしたら、陸連じゃ有名な渋谷という人が、なんだおまえらなんか尻に卵の殻がぶらさがってるじゃないかっていったんだですよ。それを聞いて宇野が怒りましてね。陸連に一人で乗り込んで行って、渋谷さんの前で行くと学生服をめくってどこに殻がついているって。そういう意気込みのある奴がいたんです。陸連と学連とで対立関係が激しかったですね。

1935年かな、ダルムシュタットでユニバーシアードの前身、国際学生陸上競技があったとき、学生だけで金集めまして、陸連の世話には全くならないで選手を派遣した。その時学連の会長だった山本忠興さんが団長になって、学連の立場をしっかりわきまえて支持してくれました。陸連の方は平沼亮三さんがいたんですけど、山本さんとほとんど犬猿の仲でした。会って喧嘩はしなかったけれど、心のなかではね。

ですから、山本先生がやっていた国際照明学会の会議（1929年）に後のIOCの委員で国際陸連の会長だったエドストロームが来た。有楽町にあった電気会館で二人がオリンピック招致について懇談する。私は役員やっていたもんだから立ち会いました。（橋本一夫『幻の東京オリンピック』NHKブックス、1994年参照）そこで山本さんが初めて東京でオリンピックを開催する可能性があるだろうかと聞いたんですね。そしたらエドストロームが「ただ難点は非常に交通が遠いことだ。それが難点だけでも、やってできないこ

とはない。だから、招致運動をやってごらんない」といった。

山本さんはその前から東京市長の永田秀次郎さんと親しい関係にあった。学生が向こうへ遠征するとき、永田さんがベルリンと東京の対抗競技、ローマと東京の対抗競技をやるんじゃないかといって、トロフィーを出したんです。山本先生はエドストロームの話聞いて、その足で体育協会の事務所へ行って、会長の岸清一さんに体協も本格的に取り組みませんか、といったら、とんでもないことだといって、剣もほろろに追い返された。彼は消極論者だったのです。山本さんが帰ったら、山本の奴は気が狂ったのかといったそうですがね。

岸清一という人は、功労があったんだけど、非常に固い人で、新聞記者との会見なんていうのは新聞記者嫌い、「ぶんや」と会わんという。だから私なんか、新聞記者になってからまだ岸清一さんはいましたけれど、絶対会えなかったですね。代理に高島文雄という弁護士がいて、これが代わりを務めたのです。

高津：1940年の東京オリンピック大会を中心になって推進したのはどこですか。

川本：やがて岸さんも腰をあげます。それから嘉納治五郎さんは積極論者でした。もう一人副島さんという人がいていろいろやりました。

変わらない体協

高津：もう一度陸連と学連の関係にもどりますが、昭和の初めに学生の自立要求があって、それ以後その対立関係は続くのですか。

川本：戦前はそういう関係が続いていたが、戦争中に合流のような状態になった。

体育協会も大日本体育会に改組され、各競技がその部門になってしまいました。大日本体育会の陸上戦技部とか、野球部とかになって、競技団体は全部解消してしまった。だから学生の組織もおのずからそのなかに組み込まれてしまったのです。文部省としては野球がいちばんいじりやすかったんでしょう、それで野球統制令なんか出して、

六大学野球に規制を加えたりしたわけです。

高津：13校問題、体協改造問題では、学生のエネルギーが原動力となり種目別の競技団体ができますね。だが学生の要求そのものはまだ完全に吸収、解決されず、学連と陸連というようなかたちの対立関係がずっと続いていた。そこで種目別競技団体化が進められていくとき、競技別団体が自立していくのですが、体協の方はどうでしょうか。当時、名古屋とか大阪に地方体協のようなものがありましたね。そういう地方の要求は体協改造にどのように・・・。

川本：地方も同調したものもあるでしょうし、全く無関心だったものもあるかもしれません。例えば陸連でも水泳連盟でも、できたときにはすべて地方組織を含めて陸上競技連盟、水泳連盟でした。その後、陸連でも地方陸上協会の代議員総会というのを開いてそこでいろいろ決めていったのです。当時は非常に活発で、代議員総会なんて徹夜でやったもんですよ。

高津：種目別組織の自立化のなかには地方の自立化というか、地方の要求も汲み上げる組織にするという、そういったことも含まれてましたか。

川本：体協内ではそういうことは全然考えていませんでした。

高津：昭和8年から10年にかけて日本運動競技連合というものができますね。それで結局体協の内部改革運動は終わってしまいます。この競技連合結成の本来のねらいはどこにあったのでしょうか。

川本：体協の組織改造をやってみてもなお各競技団体の意見が十分に反映しないことから、競技団体の有志がそれならもう体協なんてやめて日本運動競技連合を作ったほうがいいじゃないか、と考えたのです。当時としてはかなり進歩的な考えですがね。だけれどそれも1年も続かなかった。日本のなかでこのぐらい変わらない組織はありませんよ。体協はほんとうに変わらない。

高津：これはアマチュア団体の全国的な統括団体を作る運動だったといわれていますが、昭和8年から10年といったら野球統制の時代ですから、文部省としてもスポーツ団体の統括組織を欲しか

ったんではないでしょうか。

川本：そうですね。それが大日本体育会へつながっていく。流れはスポーツに限ったことじゃないですけど。産業報国会とかいろんなのができました。つまり体育報国会ですよ。大日本体育会というのは。

高津：この運動が独立化ではなく、体協の再編に終わった理由はどこにありますか。

川本：率直に言えば、財政的にそういうものを体協から離れて運営していくだけの力がなかった。体協をのっとれば別ですけどね。このとき、水泳の田畑政治、この人はむしろ優柔でそんなに乗り気じゃなかったんだなあれには。

高津：嘉納名誉会長が、そんな組織を作るなら私がもう一つ体協を新たに組織し直すというようなことをいった。

川本：嘉納さんが進歩的な人でしたからね。

野球統制と六大学野球

高津：文部省のスポーツ団体統制に迎合するという側面はあったのですか。

川本：そりゃありましたよ。野球統制が一つの表れでしたけどね。文部大臣の思想善導、あんなことに変に力をいれて。

唐木：文部省が民間のスポーツ団体を傘下に入れようとしたのか、逆に民間団体が国の庇護をもとめたのか。大日本体育会につながっていく流れの始まりは、どちらの力が働いたのでしょうか。

川本：スポーツに限らず、すべての文化活動が戦争体制に組み込まれて、政府の圧力に屈従するほかはなかったんです。

高津：野球が統制対象となったのはなぜですか。

川本：野球には六大学野球連盟しかはっきりした統制組織がなかった。高校野球連盟だとかは事業団体ですからね。甲子園の野球やるための組織ですから、野球をどうしようという考えはなかった。文部省の統制意欲によって一番いじくりやすい。なんとでもなる、野球は抵抗がない無抵抗ですから。大学でいえば、六大学のチームがあつまって

やってるだけだったのです。

体育報国会としての大日本体育会

高津：川本さんの『スポーツの現代史』に体協から体育会に改組されたときのことが書いてありますが、もう少し当時の事情をおうかがいたい。私なんかを見ると、やはり下村宏は体協の改革を競技団体型から国民体育型の組織へ転換していくとき、きわめて大きな役割を果たしたと思います。競技団体型から翼賛団体型の組織に変えたきわめて重要な人物ではないかと考えてきました。ところがこの本を拝読すると、必ずしもそうでなく、末弘とか郷とか久富とかいうバックの仕掛人が路線をひいて、下村氏はむしろ長にまつりあげられていったように受け取れるのですが。

川本：下村会長の直接の指導力はそうなかったけれど、いろいろ手紙を出していました。財政窮乏でしたからね、体協は。寄付を頼むために唐沢と湯沢を入れてほうぼうに手紙を書いていました。

高津：基本的には赤門運動会という流れが体協にあったのですね。

川本：その当時、会内で改造を主張したのは末弘厳太郎ですよ。それから郷隆。久富とは兄弟です。しかし末弘さんなんかは労働法の権威で見識の高い人でしたよ。けっして政府の権力に迎合するような人ではなかったですね。当時は権力に迎合しないといった人でもついにはさせられたのですから。しなきゃ結局、特高か憲兵隊に引っ張られる。

高津：そういう意味では大日本体育協会から大日本体育会へという転換のシナリオを書いたのは末弘、郷だったのでしょうか。

川本：それは文部官僚です。みんないやいや統制されたんです。内務省なんかも思想取締の当局者ですからもちろん参画したでしょう。しかし主としてやったのは文部省です。

高津：東大、赤門運動会は、内務省ではなく文部省との関係があったのでしょうか。

川本：赤門運動会はそういう官庁との関係ではな

くて、自主的な学生のスポーツをやった人たちが作った会です。

長く水泳連盟の会長であった田畑政治、JOCの委員長をやった人ですが、この人は東大なんだけど自分では全然スポーツやらなかったから、田畑は泳げないなんていう説があった。しゃべるだけ大いにしゃべった。浜名湖遊泳協会の顔役で金をだしたりなんかしていた。そんなことで水泳連盟の会長に祭り上げられたが、東大出身でありながら赤門運動会の所属ではなかった。

高津：大日本体育会が生まれてくるのは下からの翼賛運動の流れではなく、官僚統制と考えてよいのでしょうか。

川本：そうです。体育報国会をただ大日本体育会にただけです。文学報国会、演劇報国会は情報局がやった。みんなとにかく統制時代ですから、新聞は統制されて合併された。今の感覚では理解できないですね、当時はほんとうに気違いじみてるとしかいい様がない。

高津：大日本体育会が健民運動、国民体育指導者講習会、全国壮丁皆泳訓練をやる。実際の実施組織はどこだったのですか。

川本：例えば国民皆泳運動は、水泳連盟が日を決めて前からやっていたが、体育会になったから体育会水泳部がやった。体育会の存在した期間は短い、そんなに長くないから、体育会がこれをやったというものはありません。

高津：実際問題として、体育会といっても学校の運動部はもう学徒動員とかであまり機能していなかった。

川本：明治神宮体育会もできなくなって。だから何もやってない。終戦後しばらく体育会の名前は残ったけれども、簡単に日本体育協会になっちゃった。

陸上競技から陸上戦技へ

高津：日本体育会に対して軍部とか翼賛会とかからプレッシャーがなかったんですか。

川本：ありました。しかし、体育会になってから

は何もやることはないですよ。厚生省が文部省と二元化してましたから。当時学生が圧倒的に強く、実業団なんていうのはなかった。陸上でもどこでも一般対学生という組み合わせで、圧倒的に学生が勝つんですよ。

高津：結局、官僚統制下で外廓団体にはなったけれども、実態は文学報国会とかいうのと同じで・・・。

川本：文部省がやることをいかにも民間でやっているように見せ掛けるための仮想組織ですね。

高津：陸上競技連盟が体育会に変わって陸上戦技部となりますが、このとき抵抗や反発はなかったんですか。

川本：私なんかはこんな不愉快なことはないと思っていましたよ。みんなもう体制順応というか、上のおっしゃるとおりで、もうあきらめムードですよ。

高津：陸上戦技という言葉はだれがどういうふうに作ったのですか。

川本：それは森田俊彦という人が作った。とにかく文部省は「陸上競技では弱い」という。みんなとにかく全部英米式の読み方を変えろというんだから。

高津：例えばドイツにモデルがあったのですか。

川本：それはない。

高津：ここに戦前の陸上競技連盟の役員があります。昭和18、19年の分がないけれども、役員は陸上戦技部になってからどのような変化がありましたか。

川本：もうほとんど陸上戦技部の役員ですからね。陸上連盟はないんです。戦技部の役員だから、専務理事とかなんとはいえないわけです。戦技部の幹事というようなことで。人は引き継いでやったよ。他にいないから。

戦前戦後の人脈のつながり

唐木：それでは、戦争末期から新しく戦後に切り替わるときの様子、人脈のつながりなどをおうかがいします。

関：世の中にこれほど変わらないところはない。

戦前から戦後にかけても体協の場合もきわめて連続性が強い組織ではないかという気がする。何が変わらないのでしょうか。

川本：これはやっぱり人でしょう。

関：人ですか、やはり。それはどのような方たちですか。

川本：この岸体育会館が岸さんに対する顕彰であるように、結局、戦前から戦後へかけて人脈といえば、慶応の先輩平沼亮三、岸さんの人脈の後を引き継いだのは高島文雄さん、岸門下ですからね。

そのまた高島さんの門下に鈴木良徳がいる。鈴木良徳という人は、非常に進歩的な考えをもっていた人のように見られているけども、実はやはり岸門下ですよ。そういう人脈が流れていましたね。

高津：末弘とか郷というのは岸門下と考えていいんですか。

川本：いや、それは違う。末弘先生は、赤門運動会ではないですよ。自分ではスポーツをやってなかった。戦前理事長をやった郷さん、あの方も戦後しばらくいました。人脈はずっと一貫して戦前から戦後までながれてますね。その間に革新なんてことはなかったわけです。

唐木：戦後のドイツでは、徹底したかどうか別にして、少なくともナチスに協力したスポーツ関係の役員というのは一応引込めという動きがあったのですが、日本の場合には戦犯になれば別ですけども体協、スポーツ組織にはそういう気運が全然なかったんですか。

川本：追放された連中は別にして、なかった。公職追放などがあったが、それは、政府、つまりGHQがやったわけです。

関：たしか平沼亮三、久富達夫は戦犯ではなかったですか。

川本：一応公職追放にはなったが、まもなく解除された。陸上競技についていいますと、戦後初めて陸連の代議総会を開いたときかなり戦犯論がでた。陸上戦技と書き替えたり、戦争中理事長をやったり、体育会に入っていた人々が戦犯だと。例えば後で代議士になった川崎秀二なんか追放論をやったですよ。すごい熱気でしたよ。あのとき

の陸連の総会というのは。

唐木：そういうものは議事録にはなってないんですか。

川本：残ってますかどうですかね。

高津：川崎秀二は戦中の大日本体育会の積極派ですか。

川本：いや彼はまだあの頃は学生ですからね。昭和22年かな、彼はでてからすぐNHKの国際部に入った。

高津：戦前の体協は英米協調派というか、伊独親交派じゃなくてむしろ英米と協調してという感じでしたね。

川本：1940年のオリンピック招致の頃はたしかにそうでした。

高津：もう一つわからないのは、体協は基本的には競技団体であり、競技力向上をめざしてきたのですが、昭和10年段階から国民体力の動きがでてます。そうしたとき国民体力派と競技派というかたちでの対抗はなかったのですか。

川本：あればかえって良かった。それがなかったからいまだに「体育・スポーツ」なんです。日本だけでしょ、体育とスポーツをあんなに混同してるのは。

高津：例えば戦前の人脈に競技派の人脈があって、国民体力派が新たに出てきて勢力争いのなかで逆転した、そういう流れはないわけですね。

川本：初めからね、つまり体協にイデオロギーがなかったんですよ。嘉納さんはいわゆる体力増強の方でやった。あの人は「やっぱり人間急げば走らねばならず、走れば石につまずく」、そうって跳ぶ力、泳ぐ力を養成する。体力振興のほうでしょうね。

高津：それはただスローガンではなかったのですか。

「スポーツ」はいつから

川本：みんなやる連中が自分のやることが体育運動なのか、スポーツ運動なのか、わからずやっていたわけです。いつか竹之下休蔵先生が、日

本で「スポーツ」という言葉がいつごろから使われるんだろう、と聞かれました。それまで「体育運動」せいぜい「運動競技」ですね。「スポーツ」はいつごろからだろう。私の考えでは1923年に『アサヒスポーツ』という雑誌ができた。あの頃からでしょうといったんですがね。ちょうどそのころ大正デモクラシーで労働運動、社会運動、婦人運動、婦人参政権運動など、すべてそういうものが「運動」という言葉が使われたんです。それと混同することを避けて「スポーツ」という言葉を用いたと思う。

ところが、いまだにジャーナリズムの第一線にある新聞社では運動部ですからね。私が会友になつていて東京運動記者クラブ。体育協会は「アマチュア・スポーツ・アソシエーション」ですね。非常に観念的に混同してくる。だから体育・スポーツでずっと文部省でもなんでも、妥協しちゃってるわけです、わかったような顔して。

JOCと体協が分離したということで非常にいいきっかけですけども、どうもわからない。私は今のところ日本体育協会改造論者なんです。都道府県体育協会連合で体育協会と名乗るなら、これはそれでいい。国民スポーツ協会でもいい。だけどもおかしいことに、体協とJOCと分離したといいながら加盟団体は両方一緒なんです。懲りないですね。

唐木：国体についてはどうお考えですか。

川本：あれはあれで最初の9年間ぐらいで精力的にスポーツ振興をやろうとした。天皇杯までもらうことはなかったと思いますけどね。そのときの清瀬理事長など、もう天皇杯は返上して翌年から国体をやめたかったんです。だが文部省がやりたがった。ちょうどあの時に、内閣にスポーツ振興委員会ができて、そこで国体を存続すべきか、廃止すべきか、両案でた。そのとき自治省が、国体を持ち回りでやるのは地方の財政を圧迫するから反対していた。けれども文部省が押し切った。

スポーツジャーナリズムの草創期

唐木：先生はお仕事として新聞社の運動部にいらっしゃいました。今の言葉でいえばスポーツジャーナリズムということになります。それでアメリカなんかの新聞でも伝統的な新聞はスポーツ記事はあんまり載せないで、スポーツ欄というのはわりあい最近できた。日本のスポーツジャーナリズムというのは、始まる時点はいつでしょうか。それは「読売」が一番早かったのでしょうか。

川本：いえ、一般紙としてスポーツ欄を作ったのは「読売」が先ですが、必ずしも「読売」が先鞭をつけたというわけでもない。明治年代は30年代から新聞社がみんな主催で、例えば不忍池のマラソンなど、いろんな行事を主催していました。明治42年には日本で最初にマラソンという名をつけて大阪の「毎日新聞」がやった。その前の年にロンドンのオリンピックがありまして、そこへ相馬勘次郎という記者がたまたま行っていて、マラソンに感激して、それで帰ってきて、これからの日本は軍国主義じゃだめだ、スポーツで大いに国際的に飛躍しなければならない、と書いた。それで大阪で初めてマラソンという名をつけた競争をやったんです。新聞社がイベント屋だった。

明治44年に、「朝日新聞」は有名な野球害毒論を連載していた。これがいわば日本におけるスポーツジャーナリズムの先鞭をつけたものだと思います。それを企画したのが長谷川如是閑なんです。長谷川さんは社会部長だった。その野球害毒論に、今度は「読売新聞」が反対して野球擁護について神田で演説会を開いた。その影響で、京都であった高等専門学校の野球大会で、初めて両方の選手が整列しておじぎをして野球が始まった。大正4年に「朝日新聞社」が中等野球を始めた。その発案者がやはり長谷川です。アメリカのスポルディング社から本がいろいろ出ていて、そのなかにアマチュアリズムの規則もあった。それを取り入れて、日本で初めてアマチュア規則というものを翻訳したのは「朝日新聞」なんです。それも長谷川の腕だった。

「朝日新聞」で大正6年から『運動年鑑』を出した。初めのうちは毎号いろんなスポーツのルー

ルを必ず出してたんです。そんなにルールが一般に知られていなかった。それで東西対抗陸上競技をやった。「毎日」が選抜中学野球を大正14年からやるようになったんです。とにかくイベントが主で、書くほうのジャーナリズムはその後へくっついてきたんです。大正時代になってから、ぼちぼちそういうスポーツ記事が出るようになった。

「朝日新聞」には最近はかなり目立たなくなったが、いまだにいわゆる朝日アマチュアリズムが残ってますからね。アマチュアリズムは、アマチュアという一つの資格規定にすぎないのですが、それをまるでスポーツの倫理規定みたいに考えた。

唐木：アマチュア規則は、有資格者規定であるわけですね。逆にいいますと、そうでない人は排除するという排除規定でもあるわけです。

川本：そうですね。しかも成り立ちは要するに労働者排除ですからね。

唐木：倫理的な味をつけたのは、日本においては「朝日新聞」の役割が大きい。

川本：それと大日本体育協会です。そのなかに『理論実験競技運動』を出した武田千代三郎という指導者がいる。秋田県知事時代に日本で初めて優勝旗を出した人です。日本の優勝旗の始まりは武田千代三郎。この武田千代三郎が、東大でかけっこなんかやってまして、ストレンジの影響を受けた。

新聞コマーシャルズム

唐木：新聞社がイベント屋になっていくってのは、選手を集めるために公示したり、競技会運営をやると同時に、商品なども出したのですか。

川本：最初は商品を出した。やっぱり、販拓事業ですからね。つまり宣伝活動なんです。今でも新聞社の事業はみなそうです。最近コマーシャルズムと盛んにいうが、新聞コマーシャルズムが当時からありほうだいだった。

唐木：自社のイベントに対して、運動部の記者は関係を持っていたんですか。

川本：いや、運動部ができたのが昭和へ入ってか

らで、東京運動記者クラブができたのが昭和3年頃ですから。

商品なんかも、日本最初のマラソンでは大したものでした。賞金200円と桐のタンスその他です。目録が国立競技場の博物館に残っています。とにかくたいへんなものだった。金の屏風とかもあった。

唐木：当時の競技会は、一般的に商品が出たのですか。

川本：第一回の高校野球のとき、新聞の広告主が、自分たちの宣伝のためにいろんなものを持ってきたんです。それを長谷川如是閑が断った。アマチュア規則に反するということで。それで如是閑の発案で大阪名物「いわおこし」、あれ一缶と参加章のメダルだけにして、商品は全部断った。

唐木：先程の話ですと東京運動記者クラブが昭和3年（1928年）。そうしますと、それ以前のスポーツ記事や競技会の記事は社会部が扱っていたのですか。

川本：そうです。大体社会部の記者です。

唐木：川本さんが読売の運動部に入られて、最初にベルリン大会、初仕事ですか。

川本：32年のロサンゼルスです。

唐木：現地まで行かれたわけですか。

川本：私は行かない。あのころ特派員はめずらしかったが、1928年に渡辺紳一郎さんなんかも行ってます。ラジオ放送が初めてオリンピックに登場したのが1932年のロサンゼルス大会です。NHKがやりましてね。ただ向こうへ行って、向こうの放送局と契約して、そこから日本へ持ってくる仕掛けはちゃんとできた。ところが故障が起こっちゃたんですね。実況ができなくなった。そこで即興で「実感放送」というのをやった。その競技が終わってから放送局のスタジオへ駆け付け、そこで見てきた感じをしゃべるんですよ。松内則三という名アナウンサーが100m10秒いくつかをスタジオで言ったら28秒かかった。「スタート、スタート、吉岡先頭、吉岡先頭」、言うてるうちに10秒すぎちゃう（笑い）。聞いてるほうも、ザーザー雑音が入る。そしたら太平洋の波

の音だと思った人が多かった、と書いてありますよ、放送協会史に。

その次がベルリン。そのとき初めて電送写真が新聞に登場する。開会式の写真が日本で最初に海外から電送された。だけど、例えば読売新聞なんか見ても全然わからないですよ。どれが誰だか影法師で。それで社会部にいた高木という名文家が「モーニングに威儀を正したヒトラー総統」と解説を書いたんです。大誤報ですね。ヒトラーがモーニングなんか着るはずない。

唐木：川本さんはベルリンに行かれたのですか。

川本：行かなかった。「読売」なんて今はなんかえらそうなこと言ってますけど、当時は「朝日」、「毎日」に寄り付けなかったですから。「朝日」、「毎日」が100万出してたときに「読売」は5、60万なんです。ところがあそこはスポーツで得しましてね。まずアメリカの野球を呼んだ。フランスのボクシング、アメリカのチルデン、バインズなんていうテニスの選手。そういう海外の選手を呼ぶたびに部数が増えていく。それで最終的に70万になったんです。それを記念してそれまでの木造のひどい社屋を新社屋に建てかえた。それがちょうどベルリンの年でした。その新聞社で短波放送が受けられた。ですからマラソン、孫が勝ったときに向こうに一人特派員が行ってまして、ソン・ウィンと二語で送り社内で受けた。ところが当時短波は禁止なんで、規則を破ったと罰をくらった。

高津：ベルリン大会では国民のオリンピックへの応援の仕方に変化がありましたか。

川本：ラジオなんかで聴けるようになり、みんな珍しがった。やっぱりロスよりはベルリンのほうが国民の間に関心が高まったんじゃないんですか。しかも枢軸国時代でナチス宣伝だというようなこともありましたけどね。

私は必ずしも、ベルリンオリンピックはナチの宣伝が成功したとは思ってない。むしろIOCがナチを押さえた。ヒトラーの例のユダヤ人排撃のビラなんか全部撤収させてしまった。いちばんヒトラーが嫌がったのは会場を移すことでした。こ

れが最も効いたI O Cの脅し文句なんです。主催しているのはI O CでドイツじゃないんだからI O Cの要求をいれないというなら、すぐに会場をバルセロナに移すから、と言いましてね。私はこのオリンピックを成功させたI O Cはたいへんな功績だったと評価してるんです。

最初のうち、陸上が始まるとドイツの選手を総統席のあるロイヤルボックスに呼んで握手するんですよ。ドイツの選手にだけ。それもラツールI O C会長にやめてくれと、あなたはゲストで主催者じゃない。ここで選手に握手することは許されない、とやめさせた。ラツールはたいへんな憎まれ役でした。組織委員長のレーワールドと事務総長のカール・ディームはユダヤ系だったので事務総長をやって、大会が終わるやいなやスイスへ亡命した。ディームの奥さんが、ディーム博士とヒトラーとが一緒に写ってる写真は一枚しかないと言っていました。聖火リレーもナチの宣伝と言われているけれど、あれもカール・ディームが20年間あたためていたものです。1916年にベルリンでやるはずだったオリンピック大会で聖火リレーを考えていたのです。

商大生の必修、ホッケーとバスケット

唐木：商科大時代のスポーツについてうかがいたいと思います。

川本：非常に活躍したのはまずボートレース。商大の学生は全員ボート部員で全員H C Sに分けられた。だから隅田川でレガッタがあると、全員が応援団で行くんです。

唐木：それが今でも残ってるんです。小平の教養課程の春の体育祭にボートレースがあって、つい最近まで全員が参加しました。自分たちも漕ぐという行事がまだ残っている。

川本：あの頃、本科の学生はそんなに行っていなかったが、予科、専門部はみんな行かされました。

陸軍戸山学校の教官が商大の体育の教官になってきてたんです。戸山学校ではホッケーとバスケットが非常に盛んだったんですね。それで両方や

らされました。ですからホッケーとバスケットにはいい選手が出てるんですね。ホッケーには宇佐見敏夫君といって私と同級生です。それがロスのオリンピック大会に出て入賞したんです。バスケットでは会長をやっていた植田義巳という人。これがやっぱり商大。ラグビーでは椎名さんがラグビー協会の会長。ボートでは中川さん、朝日の営業局長、テレビ朝日の会長になりました。名コックスでした。みんなあだ名で呼び合いますからね、「おめんちゃん」ていったんですよ。2年先輩の椎名さんに、私は足が速かったということでかりだされ、スリークォーターをやらされました。中学のときからちょっとやってみましたからね。私は体が軽いもんだからちょっと引っかけられるとひっくり返ってタックルに弱い。一シーズン終わって、椎名さんがきみはやっぱり陸上に帰っていいよと言って帰してくれました。

唐木：体育の時間は体操でなく、むしろスポーツが中心だったのですか。

川本：徒手体操はもちろんやりましたけれど。そのほか必修として当時の商大の学生はホッケーとバスケットをやった。授業でボートはやりませんが、予科も本科も平等にして学内のH C Sの対抗でやるんです。とにかくボートはたいへんなものでしたね。ボート部の応援歌が校歌になっちゃった。

陸上ではね、専門部を出た村木武夫。住友石炭の社長になりまして、東京陸上競技協会の会長をやっていました。もっと有名なのは、水上達三、三井物産の会長。財界でも「ハヤブサの達」とよばれたくらい足が速かった。その頃水上さんの最盛期でしたね。関東インカレで優勝した。大会記録を作った。いい人でしたね。それからもう一人専修大学の相馬勝男さん。走り幅跳びの選手でした。この人と1年一緒でした。

唐木：練習場ってのは、陸上競技の練習場はどこにあったのですか。

川本：石神井にあった。1周300メートルぐらい。

唐木：バスケットも外ですよな。

川本：そうそう。石神井にあったんですよ。サッ

カー、ラグビーもありました。ラグビーなんかちょっと初めは強かったんですよ。明治とやって勝ったこともある。

勝利至上主義はなかった

唐木：当時の運動部の気風は文武両道といいましょうか、今は運動部だと運動部ばかりやっているのですけれど、当時はそういうことはなかったのですか。

川本：文武両道といえるかどうかかわからないけれども、年中食堂に粘ってたやつもいますからね。けれどもやっぱりかなり勉強はしました。それで社会科学の連中とも仲良くなった。

関：その当時は勝つことに対しての意識はどうだったのでしょうか。今はもう学生もそうですけれども、いわゆる勝利至上主義というか、勝つことに対する執念ってすごいんですよね。川本さんたちの学生時代はどうでしたか。

川本：人によってちがうかもしれませんが、それほど執念はなかったですね。どうしても勝たねばならないというような勝利至上主義みたいなものはなかった。もちろん競技をやるんですから勝つことにこしたことはない。それなりの努力をしましたからね。

のべつまくなしに練習してるんじゃないくて、たいてい2時間ぐらいで切り上げてました。ラグビーは私はちょっと1シーズン手伝いましたけれども、2時間ぐらいで切り上げていた。パスの練習と、あとタックル。タックルマシンに飛び付いたりする。そういう基礎的なことをやった。陸上競技では野口源三郎という高等師範の名選手だった人がコーチだった。

唐木：最近の問題に移らせていただきます。先程ちょっと出ましたけれど、体協がJOCと分離しました。あれが日本のスポーツ界にとってほんとうにプラスになるのかどうかという点でいろいろ考え方があると思います。JOCがオリンピック憲章にあるような意味で自主独立の団体になるという点で、どうお考えでしょうか。

川本：それは当然ですね。あれはもっと早くから独立していなければならなかった。日本のNOCというはっきりしたものがいないのですから。たまたま日本体育協会のなかにオリンピック委員会があって、それがいわゆるJOCの役目を果たしてたわけですね。対外的には日本体育協会は「ジャパン・アマチュア・アスレチック・アソシエーション」じゃ通用しない。だからごまかして「ジャパン・オリンピック・コミティ」とやっていたけれども、その正体は国体委員会と同じで、体協のなかの一専門部門だったんです。それがモスクワオリンピックのボイコット事件のとき独立派が抑えられひどいものでした。私と、田畑政治、清川正二、バレーボールの松平、レスリングの笹原というようなところが、どうしても独立させなきゃいかんと言って、組織の案を作りましたがなかなか容れられなかったですね。

体協はなんとなく変わってはいくとは思いますがね。日本体育協会が累積赤字を抱えていることは一口で言えば体協に昔から残る無責任体制、なんのための会長かといったらいいですね。高原須美子さんが会長にかつがれたが、これもやっぱり文部省が推薦ですかね。文部省のスポーツ懇談会なんかに出ていて青木前会長と親しかったが、よく引き受けたと思う。

財政赤字の原因は、ひとつは人件費がものすごく高いこと。職員が多すぎる。あれはみんな縁故採用ですからね。長崎宏子が民主主義がないというのは一石を投じましたね。

関：JOCが形式的には独立したわけですが、しかし実際には各競技団体が体協と両方に加盟している。ほんとうの意味で独立するには組織的にはどうなったらいいとお考えですか。

川本：独立するためには体協と縁切らないと駄目。完全に縁を切る。体協がやることは国民体育大会、それからスポーツ少年団、この二つですよ。地方にセンターがありましたが全部委譲してしましましたからね。国体は体協が直接ではなく、地方

がやるので、地方分権が確立している。だから国体は開催県が一番努力する。日本体育協会はただ主催、しかもこれにも文部省が入る。体協がやっているのは会長が行ってあいさつを述べ、あと天皇、皇后を案内するというようなことだけです。そういうことをやめて体協は地方体協の連合体になる。JOCは競技団体の構成で一本になる。

唐木：JOCが独立する場合、財源をどうするかということが問題になる。そのさい競技団体がテレビから収入をもらったり、スポンサーをつけると、コマーシャルイズムの支配下になってしまう恐れがあるのですが。

川本：ですから確かにコマーシャルイズムを利用するのはいいけれども、それに利用されてはいかん、こっちが利用するんだけれども、向こうから利用されたり支配されたりしてはいけな。例えばテレビなんかでは、テレビ局の都合で、アメリカのプライムタイムに合わせようとプログラムを変えてしまう。そういうことはやめないとはいけなです。それがやっぱりスポンサーとしての。テレビマネーというのが一番大きな収入源ですね。IOC公認のスポンサーにはブラザーマシンとパナソニックが加わっています。

がんばれニッポンキャンペーン。これはもう電通の仕事ですからね。今やっぱり日本の国内の冠大会で一番そういう点で支配力を持ってるのは電通ですよ。電通と西武の堤、それが日本のスポーツを支配している。最高人事も地位も全部リモコンですから。人事面では西武、財政面では電通。

唐木：長野オリンピックもやはりその線ですか。

川本：ええ、長野のオリンピックはとくに堤色が濃いですね。

唐木：対抗するような力はないですか。

川本：電通の対抗は博報堂です。博報堂もいくらかかんではいらんですよ。だけどやっぱりもう電通です。ISL株の半分持ってますからね。あれは国際的なスポーツエージェントですから。電通の出向社員がJOCにいます。それががんばれニッポンキャンペーンをやっているわけです。

河野謙三の会長時代に陸連がやったデサント陸

上。それで陸上がいっぺんに金持ちになった。1億以上の金が集まって、それで財団法人になったんです。

それから体協の人事は、堤なんかと同時に文部省ですね。もうひどいですよ。体協の事務局長、JOCの事務局長ともに文部省の天下りです。

関：そうすると70年代の中盤あたりから相当変わってきてるんですね。

川本：このあいだデサントの科学振興財団でパーティーをやったとき体協の事務局長がいてやりましたけど、いきなり「サッカーくじに反対とはどういうわけだ」といってきた。私は、あんなもんだ反対だといって、こんなことやるくらいならなせあんたがた力合わせて宝くじ出さないんだ。宝くじでいいじゃないですか。夏の国体で宝くじを売り出して、秋の国体で国立競技場で抽選会やっていたんです。あの掲示板に当たり番号出せばいい。サッカーくじなんて外国のものでしょうか、暴力ざたがあるのはたいていそれですから。

文部省で親しくしてもらったのは桑野さんが最後でしょう。あのころ文部省は72年に答申を出した、保健体育審議会のあの答申はいい答申だったと自賛してるんですけどね、私が起草委員長になって書かされた。江橋（慎四郎）さんがいろいろアイデアを出してくれて。

国立競技場なんかはこんど名前変えちゃいましたね、日本学校健康体育センターね。例のスポーツ振興基金はあそこでやってるんですね。体協にはスポーツ資金財団がある。だから本気でスポーツ振興に取り組む気があれば、そのお金はここで扱えばいい。そこを素通りして国立競技場でやってる。そこに文部省から6人が専属で行ったですよ。サッカーくじをやればあそこがやるんだそうです。だから文部省はやりたくて。

高津：Jリーグが始まりましたが、日本のスポーツは他もプロ化の方向にすすむと思いますか。

川本：そうらしいですね。深く考えない便宜主義が目立つようになりましたね。これやれば金が入るという考え方ですから。

関：金との関係でどんどんこう引きずられてい

く。なにかチェック機能みたいなのが必要ではないですか。

川本：JOCと各競技団体がきちんと自主的に方針を確立すべきでしょう。

正力松太郎と風呂敷包み

唐木：先程、スポーツ新聞の話がでましたが、新聞で試合を論評するとき、専門家が論評するときと、それから新聞記者が論評するときがありますね。試合の経過を含めて評論の水準が高くなると、読者のスポーツ理解というものを深めると言うんですけども。そういう意味で今の日本にスポーツ記者の養成制度というものは無いと思うんです。その辺についてはどういうふうにお考えで。

川本：複雑なんですけれど、例えばスポーツ新聞なんかでも私なんか言わせればスポーツジャーナリズムの墮落と思ってます。スポーツデザイン研究所が学生相手に1年に2回、春と秋にスポーツマスコミ講座やってやってる。2、30人集まりますので、そこからまいぶ新聞社に入ってきたのがあります。

関：新聞社のなかではどうですか。

川本：いわゆる研修なんかやってるんでしょうけどね。アメリカの新聞なんかではコラムで非常にいいライターがいるんですけどね。

自分の経験言っちゃおかしいですけど、新聞社へ入ったところもう不況のどん底です。「大学は出たけれど」という映画ができたころです。そのころ商大出て新聞社に入る者はあまりいなかった。みんないわゆる商社入っていくわけです。私もさっき言った村木なんかと一緒に、住友の試験を受けたんです。それが面接に行ってお茶こぼしちゃったんです。そんなことがあって、それだけじゃないと思ったけど、駄目になりましたね。それで学生時代から書くほう好きだったんです。だから卒業論文なんか大いに書きましたけどね。そんなことが好きだったから、いっそ新聞社へ行くかと思って、それで朝日を受けた。最後まで残してもらえたんですけど、ある人脈があって

体格検査で落とされたんです。

それから毎日新聞受けました。「自己を語る」という論文が出されたんです。自分のうちで書いてそれを郵便で出すんです。そうしたら返事が来て、次に人物考査をやるから大阪へ来てくれというんです。当時私は行けない事情がありまして、やめた。最後に試験もなんにもやらないで読売新聞にはスポーツ欄があるからそこへ行ってやろうということになった。

私が学生時代から『アサヒ・スポーツ』と『運動界』、体協から出していた『アスレックス』という雑誌に書いたものを風呂敷包みに包んで正力松太郎社長に面談しに行った。正力さんは警視庁出身ですから、警視総監やった宮田って人がいたんですよ。それは私の亡くなった親父の友人だったもんですからね。その縁故をたぐって、正力さんを紹介してくれ、名刺をもらって正力さんに会いにいきました。なんか汚い社屋でストーブ。そこで立ち話でしたよ。そしたら君は何が動機なんだって言って、英語はできるかといった。商大ですからできないと言えない。英語はとにかく商大ですからできますと答えた。そして、私の書いたものがここにありますからこれを見てくださいって、それをおいて行って、社長が預かってくれた。それから何とかしなければいけないと思って、おかしいな当時の就職運動ってのは。それから出て松屋へ行ってカステラを買ったんです。それで公衆電話に入って正力松太郎の住所を調べた。三田綱町なんですね。円タクを拾って行きました。それから家へ帰りました。すぐ手紙書いて、「あなたのためなら犬馬の労を惜しみません」と書いた。そしたらね、来ましたよ。三月でした。三月何日かに来社せよといって編集局長の名前で。それで行ったら編集局長っていうのは、あなた英語が得意だそうですね。ええまあ、という、この秋アメリカの野球団がくる、その方の仕事をやってもらうつもりですからという。給料は当社としては破格ですが、60円。60円で入社しましてやってきました。ちょうどまる10年経ってやめたんですけど、やめるときもう社屋が変わっ

て新しくなった。社長のところへあいさつにいきまして長くお世話になりましたといった。そうしたら給仕を呼んだんです。なんか命じてまして、ボンと風呂敷包みをもってきたんですね。私が預けておいたものが全部置いてあったですよ。これを君から預かってきた、これを返すといって、10年経って私の書いたものをそっくりそのまま残してくれてあったんですね。これには感激しました。

戦後は「読売」とか「報知」の嘱託をやって食わしてもらっていました。新聞記者といってもその当時「読売」は私を入れて7人、「朝日」が10人ぐらいですかね。

唐木：記事は相撲と野球ですか、大体。

川本：ええ、トップになるのは六大学野球。それから相撲ですね。さっきちょっと話しに出たけれども、ニューヨークタイムズのサンデー版ね、読売にいたときあれを「読売」でとっていたのです。それにスポーツセクションがある。アーサー・ジューリーというライターがコラムを書いているんです。それが物語的な文章で、記録はまじえているけれども、全体がストーリーになっているんです。当時の日本の新聞のやり方は、関東学生陸上競技大会は何月何日、神宮競技場で挙行。記録は次のとおり、それでおわる。それから後記といってちょっぴり10行か20行、記者の感想を書くのです。この形をつぶしてアメリカ式に最初からストーリーを書いて、記録を一番最後にもっていくことを考えました。それで整理の人などと話して採用されました。やっぱりストーリー式に書いて、そのなかに批判を交えるのがいいと思うけれどね。単なる技術評にしてしまうと、これまた一般読者にはわからないということもありますからね。

唐木：そういう意味ではスポーツジャーナリズムを大きく変えたのは、テレビといえるのではないのでしょうか。

川本：変えたというより新しいジャンルができたということでしょう。

唐木：最後に今後の展望ということで、大学スポーツの在り方とか、日本のスポーツ組織がどういうふうに変わっていくのがよろしいかということをお聞かせ願いたいと思います。

川本：日本の学生スポーツは学園紛争を契機として確かに変わってきていると思う。あれが契機で同好会ができたんです。いわゆる体育会運動部じゃない。あれがやっぱり一つの新しい動きだったと思いますね。今の大学スポーツには一種の暗さがありますね。管理主義。ある程度管理はされなきゃいけないでしょうけど、管理主義の行きすぎはこの際もうやめたほうがいいですね。できるだけ自由で自主的な部活動にしたらと思うんです。そういう点はラグビーなんかでも試みられてきているし、いい傾向も出ておりますが、まだ高校なんかではしごき事件が後を絶たない。やっぱり部員個々の自主性個性を尊重して個性を伸ばしてやるような指導をやってくれないとね。一つの型に押しつけるということでは強さは出てこない。

唐木：同好会が出てくるというのは、勿論、体育会が魅力がなくなったということもあるでしょうけれども、もう一つはチャンピオンにならなくてもスポーツそのものを楽しみたいという新しい動きがあるのではないかと思います。

川本：そうですね。例えば楽しむなかで自分のスポーツ能力というものを自ら自覚し発見することはあるんです。発見するということ、ひとつこれでやってみようという人も出てくると思うんです。同時に学生時代にスポーツを楽しんでおくということは生涯得しますね。ジョギングやるにしても、なんか社会人になっていわゆる市民スポーツとしてのテニスや野球があるわけですから。そういうものにすぐ参加できるしね。中学校時代からそうなんですけれど、とくに大学あたりで自分の好きなスポーツを発見してこれを身につけておくということがいいんじゃないんですかね。一生得するんじゃないかと思います。

唐木：スポーツ組織のことですけれど、もっとも変わらない組織を変えていくとすればどうしたらよいでしょう。

小中学校でスポーツを楽しませることが肝要

川本：さきにちょっと言いましたけれども、今の日本体育協会を府県体協連合にしてこれこそスポーツの地方分権やるんです。それで国体なんかできます。スポーツ少年団もやりたい県もあるし、どうでもいいという県もあるでしょう。それを自主性に任せる。

それからいわゆる社会体育という言葉は、もう生涯スポーツに変えたほうがいいんじゃないんですか、あれも文部省用語ですからね。学校体育と対比して社会体育という。文部省だって生涯スポーツ課ってできたんですよ。それで社会体育課はなくなっちゃった。

スポーツ振興法にはいい文句がはいっている。スポーツすることが国民の権利であるということをやっているわけですよ。権利という言葉は使っていないけれども、国民の好むとき好む場所で自由に自主的にスポーツ活動ができるように国および自治体は条件を整備しなければならない。これだけで立派な宣言です。ヨーロッパ・スポーツ憲章と同じ考え方です。

唐木：JOCが独立すると競技団体が独自の選手養成ができるようになると思います。青少年スポーツは、今は小学校から全国大会があり、小学校の子ども段階から選手養成のベルトコンベヤーができて系列化している。体協がまだ体育だなんだと言っていたときには、まだあいまいでよかったけれども、独自の選手養成がはじまるとかえて子どもたちのスポーツを先鋭化してしまうんじゃないかと気もするんですけど、そのへんはどうでしょうか。

川本：小中学校ではスポーツを楽しませるということが一番肝要ではないかと思います。スポーツを楽しませるということ、スポーツのおもしろさを身につけさせる。選手養成なんかしたら行きすぎになるんじゃないかな。専門化してしまう恐れがある。ほんとうのスポーツ才能というのはやっぱり高校に入ってから初めて、自分が野球やりたいとかサッカーがでけるとか、専門化に向かって進んでいくんで、中学校ではまだそこまでいかない。父兄がスケートをやらせるとか、フィギュア

スケートの選手にになってしまうというのなら、かまいませんけれどね。基本的にはいろんなスポーツのおもしろさを身につけさせるということじゃないかと思います。苦しさを覚えさせちゃいけないですよ。スポーツは苦しむもんだと。いわゆる鍛えるという考え方は転換したほうがいいんじゃないんですか。それで競技力向上と生涯スポーツはもともと違いますからね。競技力向上のほうはJOCが担当しているわけで、そのために金も集めたりなんかしている。だから競技団体の使命になる。

関：端的に言って日本がオリンピックに弱いのはなにが一番原因なんですか。

川本：よくわかりませんね、マラソンなんか弱くなっちゃったよね。どうしてあんなになったかね。もう私には解答できないですよ。結局、指導方法だと思うんですけど。選手の力が早く焼けきれちゃうというような指導じゃまずいんじゃないんですかね。

唐木：中学生の部活からしごきが横行してますからね。

川本：先生たちの競争意識がそうさせるんですかね。結局、しごきなんていうのはいじめに通じますしね。部員同士で上級生が下級生をなぐるとかね、とにかくいじめですわね。

唐木：だいぶ時間も長くなりました。今日はこれまでお聞きできなかった話をうかがうことができてもうありがとうございます。

【後記】

このインタビューは、1995年2月13日、渋谷区の岸記念体育館一階のスポーツマンクラブで行なわれた。一橋大学側からは、関春南、唐木國彦、高津勝、上野卓郎が参加した。川本氏は、別掲略歴のように、戦前のスポーツジャーナリストの草分けであり、戦後はわが国で数少ないスポーツ評論家の一人として活躍されてきた。私たち

は、川本氏が東京商大（一橋大学）のご出身ということもあり、これまであまり公表されていない裏話も含め、わが国のスポーツ界の内情や展望についてざっくばらんにお話をうかがうことを企画した。川本氏の話は、戦前の大学の運動部、陸上競技連盟、大日本体育協会から、戦中の大日本体育会、戦後の日本体育協会とNOCにいたるまで、きわめて広範であり、また、年代、人名を含めて詳細な証言がなされている。

特に印象的であったのは、戦前の商大の運動部が「しごき」とは無縁であり、自治と民主主義を体現しようとしていたという事実であった。川本氏の言葉から、そのような人間性あふれるスポーツの楽しさを次世代の青少年に伝えていく必要を感じておられることがわかった。

それにしても、百年一日のごとく変わらないのが体協である。それでいながら、「時局」に対しては牽強附会の振る舞いをしてきた体協。川本氏は「日本のなかでこのぐらい変わらない組織はありません」といわれた。しかしサジを投げてはならないだろう。トップダウンの改革でなく、日本体育協会に加盟する地方体協の実質的な責任と役割を強調される川本氏の着眼に、新たな体協改革の目があると思われる。

前半部分は、川本氏の著書の記述をさらに深める意図で質問がなされたため、一般の読者にはわかりにくいところがあるかもしれない。聴聞中に示される著書を参照していただきたい。

川本氏には、ご多忙のところをわれわれの企画にご協力をいただき、あらためて感謝をいたします。（文責：唐木）

川本信正（かわもと・のぶまさ）氏略歴 （1907～ ）

スポーツ評論家。日本体育協会会賓。東京都出身。東京商科（一橋）大学卒業。読売新聞記者、NHK厚生部長を経て、鈴木終戦内閣・下村宏國務相秘書官。内閣スポーツ振興審議会・文部省保健体育審議会・東京都スポーツ親交会議各委員、世界青少年交流協会理事。日本自転車振興会運営委員。慶応大学体育研究所講師、新日本体育連盟顧問など、を歴任。1974年藍綬褒賞授賞。

1973年より日本オリンピック委員会委員、1980年モスクワ大会ボイコットの政治介入に抗議し同委員を辞任。（『新修体育大辞典』不昧堂書店、1976年、ほか参照）

《主著》

『オリンピック読本』（1936年；昭森社）

『オリンピック物語』（1968年；国土社）

『スポーツのあゆみ』（1975年；ポプラ社）

『スポーツの現代史』（1976年；大修館書店）